2020年横浜ナザレン教会・受難節第一主日礼拝
「思慮深い教会へ」ルカ福音書 12:35～48

【聖書テキスト】

ルカによる福音書 12:35「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。36 主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。37 主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。38 主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。39 このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、自分の家に押し入らせはしないだろう。40 あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」
41 そこでペトロが、「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」と言うと、42 主は言われた。「主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人は、いったいだれであろうか。43 主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。44 確かに言っておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。45 しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思い、下男や女中を殴ったり、食べたり飲んだり、酔うようなことになるならば、46 その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。47 主人の思いを知りながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる。48 しかし、知らずにいて鞭打たれるようなことをした者は、打たれても少しで済む。すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」

1　COVID19の感染拡大

ここ数週間で新型コロナウィルスの感染が広がって社会が混乱し、みなどうすればいいのか分からず、右往左往しています。この世にある教会もそう。未知のウィルスに感染する人が増えている中で、教会が感染経路になり、高齢の方々や体に弱さを覚えている方々の命の危険を高めるような事は避けねばなりません。他の大規模な教会では信徒さんを教会に集めず、ネットで礼拝の様子を配信したり、礼拝の中で賛美をしないという選択をする教会も出て来ています。ウィルスが猛威を振るっている中、教会は何をどう考えて行動すればいいのだろうか？祈り求めつつ、説教の準備をしました。聖書テキストは、「**主人の想い**」を知ってその通りに行う僕の幸いを主イエスが譬えを用いて話しておられる箇所でした。教会が最も大切にすべき事は、主イエスの願い、主イエスの想い。主イエスは私達教会に何を望んでおられ、何をなせと仰っているのか、今日は皆さんと共に祈りつつ、主の御言葉に心と耳とを傾けたいと思います。

2　待っていなさい

主イエスは、自分の弟子達に何を求めておられるのでしょうか。先々週で取り次いだ40節までは、「**目を覚まして主人、イエス・キリストを待っていること**」を求めておられます。イエス・キリストが再び、私達のもとへ、教会のもとへ帰って来るのを今か今かと待ち望みなさい…と言うのです。

先程読み交わした詩編130篇に「**わたしの魂は主を待ち望みます。見張りが朝を待つにもまして／見張りが朝を待つにもまして。**」とある通り。当時の中近東の町は、城壁で囲まれていて、城壁の上には、見張りが立つ場所があったそうです。当番の兵士は、底冷えがする夜の闇の中でも、敵が町を襲ってこないか見張りをするのです。楽な事ではありません、ひたすら朝の光が地平線に現れるのを待ち望みました。しかし、見張りの兵士が夜じゅう見張りができたのは、「必ず朝が来る、明けないは夜はない」という事を知っていたからこそです。

夜の闇の中、朝の光をひたすら待ち望む見張りの兵士のように、教会の一人一人も、キリスト・イエスが必ず再び私達の所にやってきて、主の御顔を顔と顔を合わせてはっきりと見る、キリストの命が私達の死をのみ込んでやってくる輝かしい日、「終わりの日」と言われている日の、喜びの朝を待ち続けなさい…と招かれています。40節までの譬えを通して、主イエスは、教会に対して「**私を待っていなさい、どんな時にも、何があっても待ち続けていなさい**」と語りかけておられるのです。

3　ペトロの問いかけ

しかし、主の「待ち続けなさい」という命令よりも別の点にペトロの関心はあったようです。「主イエスが37節で約束してくださっている“神の国の宴”で輝かしい救い主の接待を受けることができる”のは一体誰か？私達か、他の人々か」という事が気になった、だから、41節で「**主よ、この譬えは私達の為に話しておられるのですか、それとも、みんなのためですか**」と尋ねたのでしょう。もしかしたらペトロは、「イエス様のサービスを受けるのは、すべてを捨てて主イエスにつき従い、いつもこの方のために働き続けている私達だけが、主イエスにサービスされるにふさわしい者だ。みんなイエス様から食卓のサービスを受けられるなんて不公平だ。誰もが自分達のように主のために働いているわけではないじゃないか。」とさえと思っていたのかもしれません。

終わりの日の神の国の宴に参加できるのはいったい誰なのか？使徒たちだけ、現代で言えば牧師とか有力な役員だけなのか？それとも、弟子はみんな、キリスト者は全員が神の国の宴席に参加できるのか？いやいや、それではキリスト者だけが救われて、教会につながっていない人は救われないという

事になる、それは傲慢な教会の思い違いだ、人間みんなに違いない…そんな声も聞こえてきます。ペトロの問い 41 節の問いは、「一体、救われる者は誰なのか？」という問いとなります、

4　主イエスの答え

長い教会の歴史の中、この問いには様々な答えが考えられてきました。しかし、最も大切なことは、別のところにあります。つまり、主イエスがこのペトロの問いかけに少しも答えていない、主は「あなた達のためだ」とも「みんなの為だ」ともお答えになっていない、この事のほうが重要なのです。つまり、誰が救われて誰が救われないかという問題は、人間が憶測する問題ではないのです。

では、主イエスはなんといわれたか。42節～43節。この部分は、口語訳聖書の翻訳のほうが分かりやすいので、口語訳の42節～43節を読みます。**「主人が、召使たちの上に立てて、時に応じて定めの食事をそなえさせる忠実な思慮深い家令は、いったいだれであろう。主人が帰ってきたとき、そのようにつとめているのを見られる僕は、さいわいである。**」ここでいう「家令」とは執事のこと、同じ僕には違いないのですが、主人の家を取り仕切るつとめを任せられた者で、責任重大です。取り仕切って何をするかというと、「時に応じて定めの食事の準備をする、用意をする」ことです。「時に応じて」の「時」は神が定められた「時」というニュアンスがあります。つまり、ここで執事が準備するのは、神の食卓、主の食卓です。ある定まった時に、きちんと整った主の食卓を用意し、僕たちに食べてもらうこと。それが執事の務めです。

5　礼拝

この食卓が、私達横浜ナザレン教会が年に6回持ちます聖餐のテーブルを指していることは容易に分かると思います。しかし、聖餐式だけではありません。私どもが、毎週日曜日の朝に持ちます礼拝もまた、主イエスが仰る「時に応じての定めの食事」であります。私達は、パンだけではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きているからです。神の言葉を聞かずに生きる時、私達の魂は飢え渇きます。皆さんも経験された事があるのだと思います。礼拝、時間にすればたかだか一時間半、1週間168時間の1％にも当たらない時間が、残りの99％の時間を決める…と言っても過言ではありません。私達の心を神さまに向ける、私達の命の肝心・要の時、なにものにも代えがたい、神様からの糧を頂く時間。礼拝の間、私達は、「自分」という衣服を脱ぎ捨て、神のもの、主イエス・キリストのものとしての衣服に着替え、主の食卓として備えられた食卓に連なるのです。そして、この世へと出ていきます。

主の食卓である礼拝に正しく備える、そのために大切なのは、忠実である事と思慮深くある事だとイエス様は仰います。忠実であること、つまり、主イエスに対する誠実さを失わない事。

6　思慮深い

そして、思慮深くあるという事。この「思慮深い」という言葉の意味には、「鋭い感覚を持つ」というニュアンスがあるそうです。きちんとものを弁える、しかし、それが単なる知識ではなく、自分という存在に刻み込まれて一体化し感覚にさえなっている…ということでしょうか。私達は様々な感覚を備えています。利害や損得に関する感覚はとても敏感。「損したな」と思ったら、頭で考えるまでもなく反発します。損得にすぐに反応するほどに、感覚を鋭くしなさい…と主イエスは仰っているのです。

では、何に対する感覚なのでしょうか。それは、やがてやって来てくださる主イエスの思いに対する感覚です。私達が、やがてやって来てくださる主イエスのみ心を求め、主イエスの御心に対する感覚を研ぎ澄ます、それがここでいう、「思慮深い」という事ではないでしょうか。

7　招きの言葉

主イエスは、ペトロに「そういう執事はいったい誰なのだろうか」と問い返しておられます。つまり、これは招きの言葉、ペトロを招いておられるのです。「この譬え話は、私達だけのものか、みんなのものか？」ペトロは自分の場所に立ったまま考えていました。そこは、少しも自分が変わる必要のない自分の場所です。成長することのない場所、自分の場所で、自分は変わろうとせずに問うのです。「救われるのは誰ですか」と。自分を義としてもらう為に。

主イエスは答えます。「それは、あなたの為だ。あなたを私は選んだのだから。」―でも、それで主の言葉は終わりません。「この話を自分のことだと聞き受け入れた時、あなたはそこをたたねばならない、変わらねばならない。忠実で思慮深い執事となるために。私はあなたにそうなってほしいと心から願っている。私と共に、私の食卓を備える者となってほしい」と。

8　みんなと一緒に

しかも、主イエスはペトロだけではなく、他の者達をも、私達をも招いておられます。ペトロは一人ではなく、皆と一緒に食卓を整えるからです。それが教会です。私達はひとりで主を待ち望むことはできない、教会として、教会の一員として待ち望みます。教会として、主イエスがもたらしてくださった甦りの命の中に立ち、甦りの主が与えて下さる神の言葉の糧を得て、神をほめたたえ

つつ、主を待つ思いに生きるのです。そして、私達もまた、ペトロがペトロに与えられた務めに生きるように、ひとりひとり、皆それぞれに、主の食卓を造るために手を添えます。持てるものを差し出します。そして、仲間のうちで眠りこけている者がいれば、「目を覚まそう」と励まし、死の陰に脅える者があれば、「悲しむことはない、あなたは命の主を待っているのだ」と慰める、様々な困難な中、希望を失いかけている者があれば、「人間にではなく、イエス・キリストに希望を見出そう」と、十字架と復活の主イエスを指し示します。そのようにして、私達は、教会として、終わりの日から差し込む甦りの朝の光の中に立つのです。

9　戦い

しかし、何故、そのようにみんなでする必要があるのでしょうか。それは、私達が、弱いからです。必ずきてくださる主イエスを待ち望み、主の御思いに対して感覚を研ぎ澄ます生活を送ることが当然のようにできる者たちではないから。「いつ帰ってくるか分からない主人を待つ」のは、いつも誘惑との戦いです。多すぎる戦いです。一人ではこの戦いに負けてしまいます。「どうせ主人はいないのだから、主人の代わりをお前がしなよ、それが一番いい事だ」というサタンの誘惑にたえられないのです。主イエスはこの事を45節で警告しておられます。「**しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思い、下男や女中を殴ったり、食べたり飲んだり、酔うようなことになるならば、[46]その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。**」ここで主が鋭く注意しておられるのは、自分が主人になりたいという罪の思いです。自分は主人から特に選ばれてこの家を取り仕切る力を与えられている、勿論それは僕の一人として与えられているのですが、それを忘れてしまい、自分が主人であるかのように思いはじめる。主人を待つのを忘れると、主人を忘れ、自分が主人となってしまう、全ての人間に言えることです。牧師が教会を支配しているのは自分だと思いはじめる、教会の役員の中の誰かが「いや、教会を支配しているのは自分だ」と思う、一所懸命奉仕すれば奉仕するほど、この教会は自分のものであり、自分が背負っているように思いこむ…それは本当によくある事です。

だからこそ、教会は皆でこの誘惑と戦います。この戦いのないところに、来臨の主イエスの食卓を準備もありません。皆で誘惑と戦いながら、主イエスに来臨に備える食卓を造り上げるのです。ペトロ一人では、それはできません。

10 主の言葉

そのような誘惑と戦わなかったら、どうなるのか。47節から48節。「**主人の思いを知りながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる。[48]しかし、知らずにいて鞭打たれるようなことをした者は、打たれても少しで**

済む。しかし、すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」主のことをよく知っているキリスト者、いえ、主のことをよく示されているキリスト者が主に対する備えを怠ると、それは主を知らない者が主に対して怠るよりももっと厳しく罰せられる…と主イエスは仰います。こうした言葉を読むと、「キリストを先に知ってしまう事は損なんだなぁ」という想いが頭をもたげます。キリストを知らない、教会とは関係ない、そんな生活のほうが呑気そう、主イエスに罰せられても少ないのなら、そのほうがいいや…と思ってしまう心の動きがあります。

11 多く与えらえた

しかし、主イエスはここで私達を脅しているのではありません。寧ろ逆です。48節には、「多く与えられた」とあるのです。「沢山のもの、溢れるほど豊かなものを私はあなたに与えた」と主ご自身が仰っています。47節には「主人の思い」とあります。「私は自分の思いをあなたに打ち明けたではないか。」この「主人の思い」とは「主人の願い」とも訳される言葉、「わたしの願いは、もうあなたがたに打ち明けたではないか」と主イエスは仰るのです。

それはいったいいつ、どこででしょうか、どこで主は私達にご自身の思いを打ち明けられ、どこで多くをお与えくださったのでしょうか。

12 十字架と復活

神の御子の十字架と復活を通してです。主イエスは、どれほど切なる思いで私達を救おうとされているか、私達と共に神の国の宴会の席につき、命を喜びあいたいと思っておられるか、父なる神の眼差しのもと、ただ神の愛のみが支配する関係に私達と共に生きたい…とどれほど望んでおられるか、私達の背きの罪を許し、きよめたいと願っているかー十字架と復活を貫くのは、ご自身の体を十字架に裂き、ご自身を滅びの底に突き落としてもかまわないという神の御子の切なる愛、父なる神の義なる愛。このみ父と御子の義と愛こそが、私達を罪から解き放ち、聖め、神の子としてくださいます。イエス・キリストの十字架と復活を通して、神の義なる愛、愛なる義に私達が出会うその時、私達は何にも勝る宝を最も多く頂いく者であり、神の御子の願いを打ち明けられる者とされます。そして多くを父なる神にお返しすることができるようにしてくださるのです。

13 ゲッセマネ

そして、気づかされます。「**すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される**」者とは、先ず、何よりも主イエス、そのお方であったと。誰よりも多く与えられた方は主イエス。神の独り子の豊かさを与えられました。そして父な

る神から多く任された者も、主イエス・キリストです。主は神の民を父より任せられたのです。そして、主は誰よりも多く求められ、それに応えられました。主イエスは、父なる神のみむねに、願いに最後まで徹底的に従い通されたのです。神の独り子である主イエスであっても、夜を徹した祈りが必要なほどに大変なことでした。主イエスは正直に心のありたけを父なる神の御前で申し述べられた、その主イエスの祈りの姿は、十字架にかかる前の晩のゲッセマネの祈りによく現れています。「**父よ、御心なら、この杯をわたしから取り除けてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください**」この「願い」が47節、48節の「主の思い」と同じ単語です。

ですから、主イエスが求めている「思慮深さ」というものは、祈りの深さとも言えます。「祈り深く生きなさい、表面ではなく、深いところで祈り、神のみ旨を求め続けなさい、この私がしたように」と主は私達に求めておられるようです。祈りの中に深く深く身を浸し、ひたすらに神を求め、祈りの中で主イエスの思いを知る…そのような祈りの生活をペトロはじめ弟子達が造っていくことを主は求めておられるようです。

14 成長していく

41節の問い、「救われるのは私達ですか、それともみんなですか」と問いかける事に熱心で、変わろうとしなかったペトロに対し、主は深い祈りの生活へと招かれました。それは私達も同じです。深く祈り、主の御思いを知り、主に仕え、人に仕えることで、主によって成長していく、変わっていくからです。そうして、神の期待に、責任をもって答えて行く事ができる、忠実で思慮深い執事へと、私達もまた、神の御前に成長します。深いところで神と交わり、深いところで神とつながる者へと変えられていくのです、

15 再び、COVID19対応

このように今日のテキストから示され、COVID－19の具体的対策について祈り求めておりました。説教準備中にルカによる福音書21:20～21節が偶然にも目に留まりました。「**エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない。**」

このテキストは紀元後70年、イエス様の十字架と復活の出来事から、およそ40年後に起こったユダヤ戦争の際、できたばかりの教会の信徒達が、エルサレムから逃げた様子を描いていると言われています。このテキストから、私は教会が歩んできた2000年の歴史へと思いを向けることができました。教会は戦争、飢饉、災害、疫病、教会は様々な混乱を経験してきましたが、幾度も逃げました。場所や表面上の礼拝形式をかえてでも生き延びたのです。勿論、教会にとって礼拝することは命。しかし、目に見える礼拝の形にこだわり、体

に弱さを抱える人々を危険にさらしてはならないと、主イエスは仰っているのだと思いました。十字架と復活の主イエスの御思いに心を向け、父なる神を仰いで礼拝する心。それを教会員全員が第一として祈り求めれば、神は、必ず具体的な方策を教えてくださる。だから、みんながこの場所で安心して礼拝できるように、今考えられる可能な事を全てやろう、ここに来れない方々に神のみ言葉を届ける為に、神の食卓の食事を整える為にも出来る事をしよう！と思うに至ったわけです。

　COVID－19の混乱はこれからますます広がるかもしれません。教会の根本、共に礼拝するという事が危うくなる試練の時。しかし、私達、横浜ナザレン教会が父なる神のみ旨を求め続け、深い祈りの内に歩みを進めていくならば、どのような形で礼拝を守るべきかの知恵は与えられます。そして、この試練を通して、私達はより一層、父なる神、子なる神の愛を知る事となるでしょう。試練は、大きな大きな恵みへと変わるのです。みんなで、教会として、主イエスを知り、成長するチャンス、主にあって、神の御前に、思慮深い教会へと成長するチャンスです。愛をもって私達を導いてくださる主を賛美し前に進む横浜ナザレン教会でありたいと切に願います。